



翻訳

ホルスト・レンツ著「〔エルンスト・トレルチの〕
ロツツェについての知られざる懸賞論文
」（トレルチ研究1に所収）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-11-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高野, 晃兆 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007862

翻訳 ホルスト・レンツ著「〔エルンスト・トレルチの〕
ロツツェについての知られざる懸賞論文」(トレルチ研究1に所収)

高野 晃 兆*

Übersetzung von Horst Renz' „Eine unbekannte Preisarbeit über Lotze“
(in : Troeltsch-Studien 1)

Teruyoshi TAKANO*

I.

研究が有名な学者の以前に公開されなかったそしてそれ故に取りつくりわれない学問的表現を対象にできるという状況にあることは全くめづらしいことである。最初に公開されたものは甲・兜に身を固め、そしてあらゆる面で防衛されているのがつねである。その結果、個人的な特性や目標が水面下に押しやられる。これに対するよい例はトレルチの学位論文である。この処女作でもって著者は高い評価を受けたが、体系的な意図と個人的な傾向はほとんど認識されえない。

匿名の保護がある場合には幾多の学生は彼の手許にある材料〔の知識〕が許すよりもっと大きな課題に思いきってとりかかったということにおいて懸賞問題を出すというこの古い大学の制度は無視されえない影響力をもっていた。課題を解くために幾多の学生をして最も固有なるものの多くをはき出させたり或いはつい口をすべらさせたりするのである。しかしこの事情こそが個人の才能を、著者の個人的スタイルを浮き出させ、そして有利な意味で彼に注目させたのであった!

人々はこの制度を目指してゲッティンゲンに居たことを誇りとしているように思われる: <<1784年以来ようやく皇帝陛下ご自身の希望によってドイツの大学で唯一の制度がここで始動させられた。4つの学部のそれぞれは毎年懸賞を出す課題をもった。そしてここに学ぶものはすべてこれに参加することができた。>>²

魅惑的な賞金として王の負担による印刷と<<25ドゥカーテン〔ヨーロッパで13~19世紀に通用した金貨〕の重さ>>の金メダルが提供された³。王の誕生日に、それ故6月4日に——寄付行為書がそのことを予告するのであるが——公的な集会において<<雄弁な教授>>によって

懸賞受賞者並びに新しい課題が告知された。<<論文はラテン語で起草されなければならない(後にはゆるめられる; H. Renz),そして懸賞論文の場合には通例そうなのであるが、中に著者の名前として表に論文のタイトルに書かれた標語 Devise を含んでいる封をされたラベルをそえて——何らかの方法で著者だということがわからないように——5月末までにその時の学部長あてに郵送されなければならない。>>

ゲッティンゲン大学神学部は1886年6月次のテーマを公表した:

Hermanni Lotzii placita de conscientia reci
quanti momenti sint in apologia religionis
christianae, demonstraretur.

内部の持ち回り文書にはドイツ語もみられる。ドイツ語によると:

ヘルマン・ロツツェの良心に対する見解とキリスト教の弁証に対するその意義⁴

課題は明らかに1886/87の任命された学部長として——役職の交代はいつも10月15日に行なわれた——発題権を持っている A. Wiesinger によって設定された。⁵ この新約学者についてはほとんど知られていない。しかし彼は恐らくロツツェの友人か或いは崇拜者であった。1887年5月21日に、それ故推測上の賞品授与の日の少し前に、ロツツェの70才の生誕が(もし生存しておれば)祝われるところであった、ということに注目するとき、テーマ設定がこの推論を許すのである。近い友人は死せる哲学者に対してかかる尊敬をいただき得た。(歴史家である新約聖書の)解釈学者が哲学的テーマを設定するのであるから、この様な推測が当然である。ヘルマン・ロツツェは5年前に、つまり1881年7月1日に、彼がゲッティンゲンからベルリンに移住した数週間後に亡くなったのであった⁶。

彼の自伝的なスケッチにおいてエルンスト・トレルチもこの出来事について語るに至っている。もちろん彼が

1991年4月10日受理

* 一般教養科(Department of Liberal Arts)

次のように述べるとき、謎のような誤ちを犯している：「私がゲッティンゲンへ来た丁度そのときに、彼はベルリンへ移ったので、私はもはや彼の知遇を得ることはできなかった。」⁷ 実際の経過は、トレルチは1886年ミカエル祭（9月29日）にベルリンから来て（！）、ゲッティンゲンで学びはじめたということであった⁸ われわれがこの文章からいづれの結論をひき出そうとも——この文章はいづれにせよロツェの名前とゲッティンゲンに対するトレルチの決断を明確な連関にもたらずのである。

トレルチが2年前にエアランゲンで彼の先生グスタフ・クラスによって「ただちにロツェに注意させられ」ということ、そしてこの人が「さしあたって真に決定的な人物となった」⁹ ということを考慮するとき、やっと22才になったばかりの青年にとって、このテーマはどれほど肉に刻みこまれたかは明らかであるのみならず、課せられた懸賞課題は、エアランゲンに帰るかわりに、ゲッティンゲンで研究を続けることに対する少なくとも付加的な理由でありえたということはあることとなる。確かに、トレルチがこのテーマのためにゲッティンゲンへ行ったということは絶対的にしめだされえない。結局、題材は神学の種々の部門の間で交代されたので、〔トレルチの得意とする〕哲学的・組織的な懸賞問題はたまにしか期待されえなかった!¹⁰

1886年10月3日にトレルチは Untere Masch, 11 を、即ちゲッティンゲンの壁のそばの家を警察に居住地として届け出た、そして冬学期は3科目だけ申しこんだ。3つのゼミナールに参加した彼の友人ブセットとは対照的にトレルチはエネルギーをとりわけ家庭での研究にむけたように思われる。彼のその他の学期の勉強課題と比較されると、この冬の勉強課題は最も少ないものである¹¹。

1887年3月12日に——引き渡し期間はまだ過ぎていなかった——学部長 Wiesinger はこれまでに提出されている一つの学術論文を回覧した。それが唯一の論文のままであったと言われている。「他の仕事のために」彼はまだ「詳細な批判をする状態になかった」、しかしすでに次の様に口にもらしている：「この論文は哲学によく精通している、思想的によく訓練された、そもそも精神的にすぐれた著者をおもわせる」。更に示されるように、重要なことをのべている：「しかし彼の論文は私が願っていた歩みをとっていない。著者はいくらかおしゃべりであり、課されたテーマに明確にはいっていきよりもロツェ哲学に対する自分の立場を示す（彼はテーマを拡大して）ことにより熱心であり、努力している。私はまだ決定的な判断を下すつもりはないが、尊敬する同僚の先生方に、もし先生方がこの論文に詳細な検討をして頂ければ、大変有難いのですが、そしてわれわれの

サークルのなかで弁護を代表して下さる先生に、この論文にかかる検討をし、そしてその判断によって私を支持して下さいをお願いしたいのですが。」

Knöke と Ritschl の短い覚書きが、二人は求められた報告を待ちたい、ということを示している。ぴっちり書かれた全紙〔一般に書籍の16ページ分〕でこの報告を行ったのは Hermann Schultz であった——量においてそれは同じ著者のトレルチの学位論文に対する鑑定書を越えている——。そして彼はただちに最初の文章において、テーマ設定者 Wiesinger の判定の権限に干渉したくないということを感じさせている：「判定の権限がどの程度でこの課題に十分であるのか、私は判断できない。というのはこのテーマは私にはとっつきにくいので。」第一部については包括的に述べられている——そしてそれ故に批判にとって重要な点が取り扱われている——：「良心についてのロツェの思想が簡単にそして彼の思考の全体から十分な説明もなく、しかし手際よく、展開されている。この研究の第一部の全体的な意義は第3の部分に集中している。著者はロツェの《美的》体系のうちにキリストの啓示の事実依存する真のキリスト教の弁証に敵対的な要素を見出している…云々」しめくくりの所見の内容は：「私に全体について判断せよといわれるなら、私はこの形式の研究を徹底的に改作することなしには、印刷には値しないと宣言しなければならない。しかし出来ばえは、勤勉さと明敏さと思考の独立性に関しては、学生にしてはいずれにしても非常によくできているので、私は無条件に賞金を半分与えることに賛成する——しかし賞金を全部与えることに反対であるわけではない。」このことでもって Wiesinger の判断の線が裏づけられはじめる。そして半分の賞金を与えるという可能性でもって一つの解決の方向がはっきりと浮かびあがる。この解決の方向が前向きな意見をひきだす。まず第一に確かに教会史家 H. Reuter は事態に方向転換を与えようとしている：「私は学生の、このようにかかる哲学的教養（単なる知識ではない）を、かかる精神的活動性を示している作品を読んだ記憶がない。この作品はもちろんしばしば方法論的証明の精密性を欠いている。しかし叙述全体は独特の勢いによって私を個人的に引きつける叙述である。（個々の常軌を逸していることを私は度外視する。）私は少なくとも賞金半分を与えることには無条件で賛成する。しかしわれわれが皆で検討した末、最終的には著者に完全な賞金が与えられるようになってほしいと願っている。」2番目の人として Wagenmann はこの作品を手にした。けれども彼は「この週」は時間がないということできしあたって態度を保留した。

それ故、論文はこれまでになされた諸判断もろとも学部長に帰って来た。学部長は4月16日の日付で彼の暫定的なほこび方を明確に示し、そして最終的な判断を持ちこむことになった。最終的な立場が彼に帰属するが故にこそ、彼の論拠並びに、彼の批判を支持してもらうために哲学部からの鑑定をもらうという彼の手順とがここで再生されるようにしよう。Wiesinger は書いている：「二人の判断と合意の上で、私がこの研究に与える評価にもかかわらず、この研究がテーマに真に相応した解決を与えていない、と私もまた判断する。著者がテーマそのものを変質したということを度外視しても、良心についてのロツェの学説が十分に論じられていない。またこの学説と神の王国の、神の子の立場等々の思想との連関は詳細には論じられていない。」そして今や、内容的なものにおける食い違いとして証明され、そしてすでにSchultzの鑑定において目立っていたところの明らかに批判的な点が問題になる：「その代りに著者はロツェの美的世界把握に対して詳細な攻撃を行っている。しかしこの世界把握が最初に説明されていない。むしろ私の考えによれば、ロツェの哲学ととりわけ彼の倫理的原理がああ最高の真理に——さしあたってはキリスト教信仰において実現される実践的要請にであっても——せまるということが承認されなければならなかったであろう……私は提出された判断を引きあいに出すことによって、著者に賞金全部を与えることに賛成できない。しかしそれだけに一層、彼の勤勉、鋭い洞察力、哲学的教養の認可として賞金の半分を与えることの承認が提案されることに対して賛成する用意がある。」哲学学部からJ. Baumann 教授によってなされた鑑定においては次の様に批判されている：「著者は特殊な対象についての初期の単行本をロツェの全体的見解に対する彼の理解の出発点にしていることによって、彼は全体的見解に後の書物に基づけば非常に議論の余地ある解釈を与えている……その際著者の個人的な性格と宗教的感動はロツェに生き生きとした関わりをよびおこしている、しかし彼の精神的な性質は目下のところ学問的-哲学的というよりは実践的-宗教的であるように私には思われる。」¹²

〔以上の人たちよりも〕より短い見解でもって Knoke, Wagenmann と Ritschl が次に判断を下した。到達された立場に対して彼らのうちの誰もこの論文の詳細な検討の必要性を見ていない。彼らの表明は主として報告にむけられているといえるだろう。¹³ A. Ritschl がそのことを一番かくしていない。彼はただ少しだけ注をつけている：「著者に賞金の半分を与えるということが学部長のところへ申し出られる場合、このことが王室の大学管理

委員会で提案されるようにという〔学部での〕先行する投票に私は賛成する。この条件が言い渡されなければならないと私は信ずる。」

最後の人として Schultz のそばに（〈前述の人たちと同様に〉）何の所見もなしに黙ってサインをしたのは Reuter であった。

判断の過程が当時のゲッティンゲンの学部のその他のことではほとんど目につかない構造とそこに存在する力関係への有益な目差を可能とするが故に、この過程がとりわけ非常に広い範囲にわたって再現された。Wiesinger のボス的な役割が目につく。このボス的な役割は学部長としての彼の役割と関係している。恐らく彼に帰属したのは学部の最も古い構成員として彼が明らかに利用できた特殊な立場であった。リッチェルの消極的な態度には驚ろかされる。ロツェ哲学の有識者としての彼にだったら人々は内容に関する論評を期待することができたんだが。

5月7日に Wiesinger は学部で公的な判断の草案を提案した。この草案は学長代理リッチェルが6月8日賞品授与式に際して大講堂で報告した文章とは細かい点では一致していない。リッチェルが発表した文章の内容は次の通りである：

「神学部の学問的な懸賞問題：ヘルマン・ロツェの云々……は「他の根拠を置くことは誰もできない……」というモットーをもった一つの論文を見出した。この論文は著者の勤勉と鋭い洞察力並びに哲学的教養の故に名誉ある成績を取めた。けれどもこの論文は出された課題の十分な解決とはみなされえない。というのは著者は与えられたテーマに拘束されていず、ロツェの哲学の叙述において、とりわけ彼の美的世界観を問題にして、異議をはさんでいる。それに対して倫理的原理並びに特に良心の学説を十分注意深くは扱っておらず、そしてこれとの関係においてキリスト教の弁証に対するロツェ学説の意義を十分な範囲で評価していない。従ってこの研究には完全な称賛が帰されえないが、学部はその他の長所を承認して、著者のために、著者が学部長のところへ出頭すれば、王室の大学管理委員会に賞金の半分を与えることを提案し、そしてこのことのために許可を得る用意がある。」¹⁴

定款に従って学部長のところへ要求された出頭はこの公的な集会において行なわれたに違いない。つまり「どのような種類の論文が各学部提出されたか、そしてどの論文に賞金或いは二等賞が与えられたか」が報告されたのち、「各学部長は懸賞論文の標語が書かれているラベルをあける、そしてそれを壇上の演説者に手渡す。この演説者はすぐに名前を公開する。二等賞をもらった人た

ちには、自分が誰であるかをはっきりさせるかどうか、そして論文を出版すべく促進するかどうか、或いは彼らの名前は知られないままの方がよいかどうか、はまかされる。》¹⁵

リッチェルが印刷された式辞に従って判定を朗読したとき、次の言葉がつけ加えられる：《著者は E. Troeltsch, アウグスブルク出身の神学部学生。》¹⁶

それでもって神学史の瞬間が考えられうる：学長アルブレヒト・リッチェルが式典の時に、予感もなしに、リッチェルに後続する時代がその人においてその時代のスポークスマン並びに最も簡にして要を得た表現を見出すことになる神学徒を表彰したのである。エルンスト・トレルチの場合にはいずれにせよこの時の通常ならざることの意識が確実に仮定されてよいであろう。第 150 回大学記念祭の年に彼は若者として感銘的な方法で影響力をもった大学のトップに直接自分がむかいあったのである——この出来事の故に賞金の半分が断念されなければならなかったということが忘れられえたのであった!¹⁷

このことでもって明らかになる 1886/87 の懸賞問題へのトレルチの関わりについての知識はトレルチ研究にとっていろいろなことを意味する。最も重要な帰結としては次のことが評価されうる：

1. 懸賞課題への応募はすでにはやい人生の局面で学問的な人生航路をとるというトレルチの意図を証明する。
2. 1891年の学位論文が最初の学問的な論文であるという仮定はもはや保持されえない。トレルチはそのほぼ4年前に哲学的・体系的な文章を書き下ろしていた。このことによってメランヒトンの書物に対する新しい評価・強調がなされる。
3. トレルチの全業績のなかでのロツツェへの数多くの言及の背後には一つの生産的な、しかしトレルチによっては口にされることのない文書が存在する。¹⁸
4. 鑑定者たちが、この文書においてはテーマを犠牲にしてむしろ主体的なものが表わされていると批判するとき、この批判こそその文書の著者の若くして表明された独立性を指している。
5. 1889年のトレルチの神学得業士並びに教授資格取得の願望は一つの重要な前史をもっている。この前史が、学部に願い出られて得られた許可に対して考慮されなければならない!¹⁹

II.

トレルチは後には公的な場では懸賞論文のことはもはや触れなかったということは注目すべきことである。確かに1906年のハイデルベルク大学学長就任記念講演で彼

は学生たちに次の言葉でもって提起された問題の解決に参加するように勧めた：《皆さんはこれから先の独立した研究への道をきりひらいていく。こういう研究に関してはすでにいく多の懸賞受賞者がわれわれ個々の学問の研究社会へはいる第一の門をひらいてくれている。》しかしこの大講堂ではトレルチはこのことでもって非常に個人的な経験を語ったと誰も予感しなかったであろう²⁰。人々がこれまで知っている限りでは、ただ二つの公的な文書だけが懸賞論文への言及を含んでいる、つまり1889年6月27日の上級宗教局へのトレルチの休暇願と1891/92の履歴書²¹。この調査を始めるためには、以上の言及で十分である。この調査の過程のなかで今——その著述の100年後——エルンスト・トレルチの完全に知られざるロツツェ研究が明るみに出た²²。

それは69頁を数える一つの前稿である。古い版の、横に折りたたまれた書類が糸でとじられ、1冊のノートができていた。その最初のページには次の言葉があった：

《モットー：現在存在する根拠——それはイエス・キリストである——以外の根拠を誰も置くことはできない。》

2頁目で称号なしに論文がはじまる。称号はあとからロイター教授によって頁の頭につけられた、しかも《ラテン語で》。それ故文書の確認については疑問は存在しえない²³。

Novalis の《Die Christenheit oder Europa》の文体でトレルチは始める：《中世は信仰と知識の関係にたざざわった。そしてわれわれがダンテの世界包括的な叙事詩のなかで最も純粋に感嘆するところの解決は、完全に割りきれる世界認識を生る課題とみなしたすべての人たちのなかで、最も幸福な人としてあの思想家〔ダンテ〕を登場させている。われわれ近代人はこの点においてダンテよりも幸福とは思っていない。われわれにはしばしば知識は信仰の敵であって、そして知識と信仰とは反対のもののように思われる、そしてこの誤解はわれわれの全体像にむつかしい割れ目を持ちこんだ。その結果は弁証への一般的な要求である、この弁証において信仰者は世俗的な知識の誘惑或いはあざけるような攻撃に対してキリスト教の確信が主張されるのを見たいと願っているのである。》²⁴

トレルチが彼のアカデミックな著述を始めた最初の数行のうちにすでにこれから展開される研究の基本傾向が存在する、そしていくつかの、個別の、後に詳しく論じられる動機が見出される。ギムナジウムの卒業の式辞においてまた統一的な世界観に飛躍していくことを歌った哲学詩において告げられたことは²⁵。読者にむかって、より反省的にそして哲学的伝統と現在の討論 Gegenwar-

ts-debatte と結びついて、たち向ってくる：「新しい時代が思考そのものについての反省でもってデカルトにおいてはじまる。それ以来、実践的なことと知性的なことはますますはっきりと別々に現れた。ついにカントは独断主義に対してとくに用意された最後の止を刺した。一方カントは実践的な価値を無媒介に並存させた。両者を新しくつくられた基盤の上に再び結合し、そしてそのことによって同時に物自体と現象との満足できる関係を樹立することはそのあと哲学的努力の中心点となった。フィヒテは物自体と道徳的価値とを同一とみなし、そして現象を道徳的価値の実現のための手段として理解した。シェリングとヘーゲルは物自体と現象を互に還元するという超人的な試みを行った、そして論理的な機能と実践的価値の古代的な混合に逆もどりしている。もっと控え目に、そしてもっと注意深くロッツェはこの試みを再びとりあげた、そして物自体と現象の内的な、合目的な連関のなかで価値の現実化を示そうと試みた。その際われわれは今に立っている。そしてこのことはそれ故、弁証の神学的な仕事が形而上学の哲学的な仕事と協調するとき——弁証の神学的な仕事はこのことをこれまででも思考の領域において大いなる新しい形成をする場合には行って来たのであるが——告知されている。」²⁶

内容概説や数行の引用ではテキストの内容を十分に伝えることはできない。急いで作った引用やレポートはすべてそれなりの評価をつくるが、そういう評価は四方八方からの学問的な議論にさらされなければならない。こういうことはわかっているが、22才の学生の目標設定と彼の終始自信のあるそして目立って独立的な思维方法についてのさしあたった印象を伝えるために、ここでいくつかの箇所が描き出される。トレルチが当時ロッツェの哲学に対して全体としてどういう立場をとったのか、ゲッティンゲンの学部は彼の論文を正当に評価したのか、また主題の展開が具体的にはどのようなものであったのか、といったような問題に関してはここではとりあげない²⁷

締めくくるにあたって、トレルチは次のように述べている：「[ロッツェにみられる] 評価できないぐらい大きい結果は沈黙せるそれ [信仰] ([……] は原著者) に従った前提の形而上学的原理への発展である、この原理は知的な諸関係のそれ自身において首尾一貫した織物をつくることを許すのである。この原理においてわれわれの信仰は全存在と共に矛盾のないそして思惟必然的な統一性を義務づけられる。そしてそれ故われわれの分裂した教養にひどく失われていた確信と一致が返される、その結果われわれの分裂した教養はわれわれの時代の誇り

である経験科学のためにその信仰を犠牲にする必要はもはやないし或いはその信仰を不合理的な信仰(Credo quia absurdum) のおぼろげな恐怖を通して獲得する必要ももはやない。それ以上のことは弁証によっては要求されない、信仰へと強いるものは弁証ではない。弁証の基本的な原理はまさしく信仰そのものからひきだされる、何となれば弁証が信仰を考えるものとするからであるというのが弁証の特有の本質である。このことは弁証は大いなる円環であるという一語で表現される。しかしここでは弁証はすべてを包括する世界認識というあらゆる探求と同じ劫罰のなかにいる。もし唯一の真理しか存在しないとすれば、あの唯一の真理を本当に真実なる真理として証明するために、その確固とした基盤の上にてこがおかれるような唯一の真理の外には、他の、もっと真実な真理というものは見出されえない。キリスト教が世界の光であるとすれば、この光は他の光によって照らされえないし、そしてこのことによって光として認識される。人々はこの光のみを世界のすべての隅と鬘のなかまで照らしこませることができる。そしてついにはこの光が世界から投げかえされて、一切を光の海に変えるのである。」²⁸

実際、信仰を《益々純粹にそして益々独立的にそれ自身から理解する》(69) のがトレルチの意図である。けれどもここで行動しているのは神なき世界に戦いを告げる凡そ無自覚的な信仰ではない。むしろ《信仰》は現実がそこから組織されそして構築される唯一の確固とした点であることを約束する。このことを示したのがロッツェである、《現象は感受性の強い人においてはあの物事を構成する、その結果人々はこの働きと共に始めて物事の全存在を持つのである。認識の過程は彼にとっては出来事の一部である、そしてエーテルの振動が見ている〔人の〕目を通して色に変えられたときに、人々は現実的なものを持つ》(59)。

この見ている目はトレルチにとってはいわば現実性の基礎、つまり貫徹と結びつきとての場所そして現象の逃亡における唯一の確固とした点となる。目に似て、信仰は結びつきの観察可能な場所である。信仰の方へ目をむけることは絶えざる変化を意識することである：《ここではすべての理論は多彩な生きる形姿に屈服しなければならない、というのはこの考察にとってあらゆる存在するものはその存在の単なる事実を通してすでに十分に正当化されている。」²⁹ 著者はこの点に《信仰の事実のうちに原日付(Urdatum) を持っている》と信じている人たちとの鋭い対立のなかへ《自分自身がおかれているのを見るのである、《この原日付からすべての他の世界知はわれわれの経験科学を考慮する必要なく計算さ

れうるのである……ここで代表する見解はもちろんはてしなき可変性へと通じており、そしてそのことによって教会の関心に逆らっているように思われる。しかしプロテスタントにとってはまず第一に彼は個人的な確信をもって——そしてそのためにはとりわけ善き学問的良心が必要であるが——彼の信仰を伝えるという原則が妥当する。統一と安定性はプロテスタントにとってはイエス・キリストの人格にいつも等しく拘束された状態のうちのみ存する》(10)。

この文章にみられるものは近代的な生のダイナミズムの無制限の考慮である。実際まさしく近代的な生のダイナミズムが完全に信仰のために要求されている。確にその際教義も溶けこんでいる。そして《教会》も変化の現象のなかえおかれている³⁰、しかしそのために統一的な現実性の視界の大いなる可能性が現れる。《われわれの信仰の創始者と完成者へ》帰っていくことによってのみ《この信仰はここで得られた生の力とこの信仰をとりまく時代の雰囲気は無意識的に創造的な貫徹のなかで個的全体となる》(5)、そして《ある歴史的事実》への結びつきのなかでのみ、いつもは自由に展開するキリスト教がその《本質的な統一》を確保するのである。

この考察の内的論理は哲学と神学間の虚構の隔壁の撤去並びに信仰論と道徳論間の虚構の隔壁の撤去に至る³¹

近代的にダイナミックな変化の出来事への決定的な信奉は同時代的—神学的文脈のなかでは通常でない来世への期待の強調が現れることに対する理由をも形成する。《この期待が拒否されるか、或いはより本質的でないものとして背後へおいやられるとき》、それは《われわれの信仰の宿命的な被害》(35)³²である。

トレルチの直接の先生の誰も現代に対して同じような帰結をもっては心中を打ち明けなかった。Kaftan も Ritschl も——彼らの講義においてロツェ論文に対する背景が生みだされた——同じような見解をもっては現われなかった。むしろ上述の先生達の同じ時代に公けにされたものと比較するとき、トレルチの神学的概念のおどろくべき独自性が示されている³³もしわれわれがこの独自性を十分に説明しようとすれば、われわれは大学時代の先生によりはむしろ決定的な教育体験をもった若きアウグスブルク時代を指示することになるであろう。何となればトレルチの思考が当時きわだたせたことはキリスト論的基礎づけと無制約的關係性のあの共存であった。当時の有名な神学者の誰にもこのような包括的な秩序づけはみられないし、また所与のものあのようにはとんちやくな、自由な記述はみられない。ここにはキリスト教信仰——その目じるしは目ざめた知覚、即ち

結びつける目による現実性の記述である——の開店が告げられている。それによればキリスト論的根拠づけの必然性は無数の知覚と結合がふだんはけって強調されない主題においてばくぜんと集められるという事情に発展するかのように見える。

むしろトレルチは、事実、生涯にわたって、近代的な《形而上学》を求めた、そして知覚と主題の上述の連関を理論的にそして体系的に練り上げようとした³⁴彼は、休むことなくそして無制限に、結びつける活動に献身し、そしてそれ故にあの現実的な世界統一——それは生活の実行のうちに含まれておりそして生活の実行の広がりにおいて現象へともたらされるるのである——を間接的にまなざしのなかへ持ちこむという全く逆のことがより真実らしいのである。

厳密に言えば、トレルチが《私の著書》(GSIV, S. 15を比較参照)においてのべているあの《青年らしい体系夢》は1887年のロツェ論文においても感じられえない。ロツェ論文においてはむしろすでに彼の著述活動全体の変えられないメルクマルであるところの近代的なダイナミックさ、即ち現実性をはちきれるばかりにふくんだ発言をしたいという典型的な衝動が現れる。だからわれわれはこれから続くものに対する基本的な説明の根拠を彼の本来的な新鮮さのなかにあるトレルチの最も初期の学問的なテキストのせいにせざるを得ないであろう。

原 注

1. 時には懸賞論文が昇進の業績としても承認されえた。(例えば、1831年3月28日のゲッティンゲン大学神学部における私講師の許可についての規定 § 3を比較参照せよ)——特別なケースがその際 G. Simmel に関して生じた。得業士のために起草された彼の論文はベルリン大学哲学部の賛成を得られなかったのち、希望の目的のために1880年に賞を与えられたカントに関する論文を提出することを彼はすすめられた。この論文でもって1881年に昇進が行なわれた (Buch des Dankes an Georg Simmel. Briefe, Erinnerungen Bibliographie……, hg. von K. Gassen und M. Landmann, Berlin 1958, s. 14 ff. を比較参照)。
2. 通達で次のように言われている: 《われわれはこの通達を通してわれわれが以下の思想によって導かれた決心を打ちあげたいと思った。その思想とは、われわれのゲッティンゲン大学は今の繁栄とよい状態を先生方が立っている熟練と名声に、そしてゲッティンゲン大学がドイツの他の大学に較べて秀でている種々なる

有用な制度と施設にとりわけ感謝しなければならないので、人々があてにしているもの〔基金〕が寄付されるならば、それはゲッティンゲン大学にとって有利になるようにという思想である。つまり学ぶ若者に勤勉と応用によって頭角を現わし、彼らがゲッティンゲンで持つところの、時間を有効に使うというチャンスを目的にかなったように使うという理由が生ずるにという思想である。》J. Pütter: Versuch einer akademischen Gelehrten-Geschichte von der Georg-August-Universität zu Göttingen, 2. Teil, Göttingen 1788, S. 310 und 312.

3. A. a. O. S. 311.
4. 以下に利用される文書のすべてはゲッティンゲン大学記録保管所にある。ここで記されたテーマが全部で7つの提案のなかで1位を占めた。主として新約聖書の釈義に関する諸テーゼがこれに続いている。
5. 1887年4月16日の日付で学部長は彼の後継者 Wagenmann に《来年の課題を添えて頂きたい》とたのんでいる、この文章から本文中の発題権はある確かさをもって推測される。——それはそうと下記のKnocke によつて設定された懸賞課題は解かれないままであった：《ルターの礼拝上の諸原則は16世紀の福音的教会秩序にどこまで一定の影響を及ぼしたか？》——これに対して平行して公募されたコンテストで神学士補 Heinrich Hackmann の (Jak. 1, 2-4 についての) 説教に賞金の半分が与えられた。—— Wiesinger (1818—1908) は1860年から1895年までゲッティンゲンで教えた。
6. Lotze は1844年ゲッティンゲンで Herbart の後継者となった。
7. 《Meine Bücher》, in: GS IV, S. 5 を比較参照せよ；強調〔原文イタリック〕は H. Renz.
8. H. Renz: Troeltschs Theologiestudium; in diesem Band S. 51.
9. 注7と同様。
10. トレルチは手紙によってこのテーマを知ったという仮定が最も簡単である。或いはゲッティンゲン経由でアウグスブルクへ帰郷しようという気になったのかもしれない。ゲッティンゲンへの決断はエランゲンで下されたのであろう。エランゲンで1886年8月10-12日に Uttenruthia の第50回創立祝祭が行なわれた。8月5日にベルリンを退去（軍務パスへの記入によれば）したトレルチは彼の先生 J. Kaftan, 彼の父並びに Bousset と同様この祝祭に参加した。諸報告はかつての宗教教師 F. Boeckh についてだけ矛盾している（この問題では F. Nägelsbach: Die Uttenreuther 1836

—1886, Erlangen 1965, S. 69 と der Bericht über das fünfzigjährige Stiftungsfest, Erlangen 1886 が対立している）。更に Uttenruthia でいつも歓迎される G. Claß を可能な客としてつけ加えれば、エルンスト・トレルチにとってきわめて有意義なサークルが集ったと考えてよいであろう。

11. 彼は Ritschl の《教義学 I》, Schultz の《創世記》とロイターの《教会史》の受講申請をした。1887年3月3日、学期終了直後、トレルチは軍当局に《アウグスブルクへ行く》と届け出た。
12. Julius Baumann (1837—1916) はゲッティンゲンで1869年以来教えた、そしてロツェの弟子であった Wiesinger は彼に《この研究についての哲学的サイドからの判断を頼んだ》。そして Baumann は、彼が書いているように、この研究を《指示された観点から詳細に検討した》。それによれば二人は懸賞論文における反キリスト教性という憶測上の非難に対してロツェを保護するのに協力したかのように思われる。
13. 独特な研究への言及は Knoke の場合にもきわめて容易に見出される：《この研究の恐いもの知らずの若者の思い上がりには私は反感を感じなかった。》
14. A. Ritschl: Festrede im Namen der Georg-Augusts-Universität zur akademischen Preisvertheilung am 8. 6. 1887, Göttingen 1887, S. 17.
15. Pütter, S. 311, 配語は私によって少しだけ変えられている。
16. A. Ritschl: Drei Akademische Reden, Bonn 1887 はなるほど賞品授与のための挨拶を含んでいるが、判定とトレルチの名前は大学の単独の書類のみみられる。平行して行なわれた5つの説教についてはどれも称賛に値するとはみなされなかった。
17. 一つの説教に対する半分の賞金は1888年の学部の記録に偶然に数字が書きこまれていて、しかも 112.50 Mark に達している。説教と論文に対して同じメダルが出されたと仮定されると、トレルチの半分の賞金もこの額であった。——トレルチに1887年の夏学期に Schultz (25M) と Wagenmann (30M) のところで授与されたゼミナール奨励金を合わせると（学部長の報告並びに王室大学管理委員会の支払いリスト参照）、トレルチはこの一学期に大学で170M かせいだ。しかし成績によって三重の観点〔懸賞と二つのゼミナール〕で目についた——これは〔金銭とは〕比較にならないほどずっと重要なことであった。—— Ritschl が8月8日、〔名誉〕学長、つまりプロイセンの王子 Albrecht の臨席の場で祝辞をのべたところの8月7-9日の大学記念祭をトレルチと共に体験したに違

- いない。8月11日になってようやく彼は Göttingen に別れを告げた。
18. ロツェ哲学のまとまりのある叙述をトレルチは後にはもはや試みていない。》Die Entwicklungsidee des historischen Realismus ……《のタイトルの下で展開されているもの (GSⅢ, 464 ff. [ヨルダン社刊, トレルチ著作集 6, 5 頁以下], 特に 472-477 [同書 16-22 頁] を比較参照) がきわめて容易にそれに該当する。
19. トレルチが振りかえりながら、《数名の友人が大学で努力して大学教授資格を獲得した》(Die Kleine > Göttinger Fakultät < von 1890, in: CW 1920, Sp. 282) と書いているとき、障害の根拠や《友人たち》の名前についてはさしあたっては推測がなされうるだけである。恐らく《威嚇する <小さい学部> について語った老ボス》は Wiesinger であった。トレルチもブセットも同様に彼の講義を聞かなかつた。ロツェ研究こそ、それがどれほどトレルチに教授資格取得への道を開くのに適切であったにしても、申し述べられた理由から、Wiesinger の消極的な態度を結果として持ったということが考えられる。学部が 1889 年秋に若い後から追いついてくるエネルギーに反抗したという噂はどこにも認識されえないし、教授団の年齢構成を考えると、ありそうもないこととなる。これについては Ritschl が 1889 年 1 月 12 日に (彼の死の数週間前) 大学の理事に書いている: 学部の 6 人の同僚のうち 2 人は 70 才を越えている, 他の 2 人は 65 才を越えている》。トレルチ, ブセット, グレーデとラールフスの教授資格取得申請すべてが H. Schultz が学部長のときに行なわれたということが注意されなければならないであろう。Schultz の教義学のゼミナールでブセットは 1887 年の夏学期に 30M の報奨金 (トレルチは同じときに 25M) を得, そしてここで彼は 1887 年から 88 年の冬学期に首席となった。それに対して彼に再び 30M が与えられた。(トレルチは同じ企画において 30M の報奨金を得た)。二人の友人はいずれにせよ Schultz に十分に知られており, そして目立っていた。—— Schultz の役割をふさわしく評価するために, グンケルの父が息子ヘルマンの奨学金の申請に当って, 1887 年 11 月 23 日付で, 《特に Schultz 教授》は《息子の成績に関する情報》を提供してくれるであろうと伝えていることも述べておく価値がある。—— Wagenmann (1823-1890, 1861 年以来ゲッティンゲンで) の教会史のゼミナールで, ブセット (1886 年から 87 年の冬学期) とトレルチ (1887 年の夏学期) が相次いで 30M の報奨金を得た; その限りで二人はこの先生にも好意的に知られていた。(各ゼミナールに対して首席に対する《給与》と並んで各学期当り二つの報奨金が割当てられていた。ゼミナールの参加者数についてはこの書物の 51 頁以下の H. Renz: Troeltschs Theologiestudium, Anm 10/11 を比較参照) —— それはそうと得業士試験に対する許可に際しては申請者の数よりは特定の専門への関係が問題であったのではないかと考えるべきであろう。例えばグレーデとブセットの場合にはトレルチの場合と同様組織的な傾向が認められる (以下のものを比較参照, Schultz ゼミナールにおけるブセットの報告による成績並びにすべての志願者の得業士のテーゼ, 更にグレーデは 1891 年ボンの Ludwig Lemme の後継者として候補に上がったという F. W. Graf によつてのべられている事実: 次のも比較参照せよ: Profile: Spuren in Bonn, in diesem Band S. 108 f.). 《組織神学》部門では教授資格取得はできなかった (Regulativ von 28. 3, 1831, § 5 を比較参照) 上述の者すべては他の部門にまわらなければならなかった。このことは再び競争をきびしくした。いずれにせよ規制することをよぎなくされた。この規制を友人たちは学部において《ひたすら苦勞をしてなしとげた》。1889 年の志願者のなかでブセットは多分最も弱い立場であった: 哲学博士の学位を与えられたラールフスはグレーデと同様すでにゲッティンゲンで教区の視学であった (1884-86 グレーデ, 1888-90 ラールフス), そしてトレルチは Ansbach での優秀な成績証明書 (トレルチはバイエルンの聖職採用試験に 1 番であった。この試験が Ansbach で行なわれた) 並びに懸賞論文によってブセットをしのいでいた。—— しかしブセットは確に 1888 年のミヒヤエル祭 [9 月 29 日] から 1889 年のミヒヤエル祭まで 1 年間をゲッティンゲンで関係を深めるために利用することができた。ミュンヘンの教師ゼミナールに滞在していたトレルチと異なって, ブセットは彼の試験 (1888 年 7 月) のあとすぐに学問的研究のためにゲッティンゲンへ帰っていた。得業士試験のための許可の申請を彼は確かに 1889・11・12 に —— トレルチのほんの 1 日前 —— ようやく出した。この一年間の学問的研究の進展について間接的にトレルチの手紙が証言を与えている。この手紙は牧師補から帰ったあとブセットに対して自分が《学問においてとりこされた》印象を語っている: 《ここ数日或いはむしろ数ヶ月私は君によつてもそれに応ずるよう扱われている様な気がする。私は当時君の優越性をすぐに感じた。がそれをもちろん心よくは思っていない。もっとも私は当時君と張り合うことのできないことを非

常にはっきりとわかっていた。私はつねに君から、しかも一切の可能なことについての好意的な啓発を受けた。そしてだいに君の研究の内容全体を知った……」(Brief vom 1. 10. 1892 an Bousset, unveröffentlicht, UB Göttingen)。90年7月16日の得業士試験に際して、教授資格取得にむけて「更に一層神学的な業績」をあげるために(Dekanatsbericht 1889/90を比較参照)、プセツに課せられた課題はたぶん彼の(他の人よりは)弱い立場の結果であった。結局彼はまた実務的な職 das praktische Amt を経験していない唯一の人であった。——新約部門への申し込み者としてプセツは J. ヴァイス並びにその競争相手ヴレーデ〔の二人〕を直接の競争者とした。もし人々が、プセツが研究をはやくまとめ、そして90年7月16日に〔教授資格審査の時の〕質疑応答をうけることによって、すでに彼の前に申し込んでいた(89・10・14)6才年上のヴレーデを決定的に追い越すのを見るとき、人々は突然学部がヴレーデのために動きだしたのを見るのである。プセツは彼の優位な地位を失い、彼は1891年の夏学期にはじめて講義をすることができたのである——ヴレーデと同時に、恐らくヴレーデは新約部門の代表者である Wiesinger を保護者に持っていたのであった。つまりヴレーデはロツェのところでも同様 Wiesinger のところで研究して来たのであった(Angaben in Wredes Lebenslauf in der Personalakte, Göttinger Universitätsarchiv)。

20. E. Troeltsch : Die Trennung von Staat und Kirche, der staatliche Religionsunterricht und die theologischen Fakultäten, Akademische Rede zu Feier des Geburtstagsfestes des höchstseligen Großherzogs Karl Friedrich am 22. 11. 1906, Heidelberg 1906, S. 64.
21. 申請書においてトレルチは得業士の試験のためにゲッティンゲンを選んだことをとりわけ彼が「そこで懸賞論文によって大学の教官にすでに知られていた」ことを理由にあげている。——明らかにそれから生じたボンへの招へいのことを考えに入れて書き下された履歴書において次の様に言われている：「ちなみに私は当時この学部によって提出された懸賞問題「キリスト教の弁証に対するロツェの意義」にとりくみ、そしてこれによって賞金の半分を得た」。
22. 探索に際して Hermann Blome, Göttingen に決定的に世話になった。つまり彼はこの文書をついに発見し、また鑑定もしてくれた。
23. トレルチへの賞金の半分の授与は下記にも報告され

ている : Chronik der Georg-Augusts-Universität zu Göttingen für das Etatsjahr 1887-88, Göttingen 1888, S. 12. トレルチの周囲で懸賞論文に対する関心がどれほど高かったかは彼の学友会仲間、ベルリンでの学友そして後のミュンヘンの牧師ゼミナルでの仲間である Gottfried Seiler (1866-1940) は1886年に Hofmann-Thomasius 財団主催のエアランゲンの神学部によって提起された懸賞論文に応募して成果をあげたということにおいて認識される。Seiler は後にルンメルスベルガーの教会奉仕員の施設の創設者にして指導者となった(Unterlagen im Archiv des Theol. Seminars in Erlangen)。

24. Novalis : «ヨーロッパがキリスト教の土地であり、キリスト教徒の一つのまとまりが人間的に形成された世界の一部を占めたすばらしい時代があった……」(Novalis : Schriften, hg. von P. Kluckhohn u. R. Samuel, Stuttgart 1960², 3. Band, S. 507)。最初の文章でただちにダンテの名前を挙げていることは同じく聞き耳をたてさせる：彼の全生涯を通してトレルチは再三この詩人をひきあいに出すであろう。1887年のロツェ論文の第一ページから1922年の歴史主義の巻の最後のページに大きな虹がかかっている。歴史主義の巻では次の様に言われる：「それを最も有効に表わす象徴があるとすれば、それはかつて『神曲』がそうであり、その後は『ファウスト』がそうであったように、偉大な芸術的な象徴であろう。しかしながら一つの時代にそうした象徴がもし与えられるならば、それは幸運な偶然であって、それらが現れるのは概してやっとその時代の終りになってからである。たとえそうした象徴が欠如しているとしても前進しなければならぬ……」(GS III, S. 772。〔ヨルダン社刊, トレルチ著作集 6, 445頁。])——以下をも比較参照 Ernst Troeltsch, Briefe an Friedrich von Hügel 1901-1923, hrsg. von K.-E. Apfelbacher und P. Neuner, Paderborn 1974, S. 105f. : «私は時の経過のなかで……いくらか中世的になった、少なからずダンテを熱心に読んだことによる。ダンテは私にとっては聖書の後に来て、そしてゲーテやシェクスピアと共に私の聖者である」(Brief vom 31. 1. 20 ; テキストにおける強調は私による)。
25. H. Renz : Augsburgische Jahre, in diesem Band, bes. S. 24 und 30f.
26. Manuskript S. 68f.
27. 懸賞論文の出版は準備中である。この論文のより正確な分析は若きエルンスト・トレルチの発展史の連関の中で専ら探索される。彼の伝記のすべて今日知ら

- れている要素はこの発展史に関係させられなければならない。
28. A. a. O. S. 64f. (強調は H. R. による).
29. トレルチは《キリスト教と呼ばれるところの精神的な生活感情の流動的な力に対してそのつどの時代のムードにふさわしい、キリスト教的文書〔聖書〕の精神から再三生れた個別的な把握》(29)を要求する。——《キリスト教のすばらしい変様力のおかげで、キリスト教はトーガ〔古代ローマ人の着用した外出用のゆったりした長上着〕の時代にはある別のものであり、修道服の時代にはまたある別のものであり、そしてかつら〔17—18世紀には禿頭の人にかぎらずかつらをかぶることが紳士のシンボルでもあった〕の時代にはまたある別のものである……》(語順は少し変えてある H. R.).
30. キリスト教は《あらゆる理性を超越した精神力として》現われる。《この精神力は、神学がキリスト教をいつも新たにとらえそして永遠に呪縛しておこうとする教義学というねずみとりを無視している》(5)——《みかけ上キリスト教の本質から生じるが、いつもキリスト教をひたすら世俗化して来たところの教会概念からわれわれが解放されるということは少しも有利なことではない。教会は、この見解にとっては、むしろ自然的な社会衝動の結果であり、あらゆる法制度と同様自然的な諸関係への産物であり、そして時代の状況に従ってさまざまな形式をとりうる。しかしその際教会は個人の自由な神の子の身分を何らかの教会政治的或いは教会警察的束縛にとじこめないという条件付きで》(55).
31. トレルチの徴候は《哲学と神学の災いに満ちた原理的分離に反対する方向に》むかっている。《この分離は多くの人たちによって神学の解放とみられているが、しかし実際には、哲学者から窮屈な思考の規律に従う必要性を強奪する手段以外の何物でもない》(9)。《信仰の宗教的感情と良心の倫理的な神聖性はそれ故実践的確信の狭く、しかし非常にはっきりと制限された全体——これは個々の感情以外のものと関係しない——へいっしょになって流れこむ。信仰論と道徳論とは——その分離に賛成するのは根本的に文献的儉約の要求しかみとめられえない——まさしくこの観点の下で不可分に結合される。そしてこの結合からはキリスト教の世界観のしっかりした簡潔性が力強く現れる》(53)。このためには Troeltschs Lizentiatenthese Nr. 14 (in diesem Band, S. 300).
32. 期待もしくは未来のこの強調が当時少なくともゲッティンゲンにおいていかに目立ったかは Schultz の鑑定からも明らかである。彼は述べている：《〈期待の契機〉の必然性が強調される方法はいずれにしても課題の限界をはるかに越えている。》
33. トレルチの保存されている大学時代の筆記を用いて彼の кафтан への依存の度合いが広範囲に研究される。Ritschl に関する同じような問題に対してはなるほどトレルチ自身のノートは手にはいらぬが、80年代の信頼しうる他の筆記が手にはいっている。
34. 例えば《Meine Bücher》《における彼の言及 (GS IV, S. 15 ff. [荒木康彦訳「私の著書」創元社刊 21頁以下]) を比較参照。